

# 1580年代の肖像画に見るエリザベス I 世の服飾 — 「篩の肖像画」を中心に —

松 尾 量 子

Costume of Queen Elizabeth I in the 1580s.' Portraits  
— particularly considered of Elizabeth I : the 'Sieve' portrait —

Ryoko MATSUO

## 要 旨

エリザベス I 世は生涯に非常に多くの肖像画に描かれているが、その中には篩を持って描かれている肖像画が何枚か含まれている。現在シエナに残されているエリザベスの「篩の肖像画」は、画面全体が非常に複雑な寓意を組み合わせて描かれており、そこに見られる服飾もまた、肖像画の意図を示すための重要な役割を果たしている。この意味において、1580年に描かれたシエナの「篩の肖像画」に見られる服飾は、エリザベス I 世の晩年の肖像画に顕著である装飾性に溢れた荘厳さを演出するための重要な道具立てとなった最初の例であると言える。女王の手に持たれていた持物としての篩は、1590年頃には、臣下から女王に献上された宝飾品—象徴的な意味をもつ服飾品—のひとつとなって、1590年頃の肖像画にみることができる。

### 1. はじめに

イングランドのエリザベス I 世(在位1558—1603)の肖像画には、女王が手に篩をもって描かれているものが現存している。これらは通常、「篩の肖像画」(‘Sieve’ Portrait)と呼ばれている。エリザベス I 世は、その生涯に非常に多くの肖像画に描かれているが、今日、エリザベスの肖像としてよく知られているのは、1592年頃に描かれた「ディッチリイの肖像画」である。ストロングは1546—7年に描かれたエリザベスの肖像画と「ディッチリイの肖像画」とを比較して、「40年の間に一人の個人がシンボルになった」と述べている<sup>1</sup>。即ち、生身の人間としてのエリザベスの姿が描かれている初期の肖像画は、「ディッチリイの肖像画」に代表されるような「宝石づくめのイコン」<sup>2</sup>へと変化をとげたのである。このような肖像画における変化の兆しは、篩を持つ女王の肖像画が初めて描かれた1579年に始まったとされている<sup>3</sup>。

「ディッチリイの肖像画」に見られるように、エリザベス I 世の後期の肖像画は、ルネサンス期の西欧絵画の基準からするとアナクロニズムともいえるべきものであった。しかし、装飾性によって獲得された荘厳さという女王の肖像画のもつ独特の効果は、エリザベスの「驚異的なワードローブ」とそれを用いる「政治的なわざ」によって可能であったことが指摘されている<sup>4</sup>。1579年の「篩の肖像画」に見られる服飾を「ディッチリイの肖像画」に見られるもの

と比べてみると、10年余りの間に大きな変化が起っていたことが明らかである。篩をもつエリザベスの肖像画は、1580年代を通じて描かれた。それらは必ずしも有名な画家によって描かれたものではなく、ある特定のイメージを広めるために首席画家によって描かれた肖像画をもとに描かれたものであることも多い。絵画としてのレベルに差のあるものを同列の資料として扱うことは、問題があるかもしれない。しかし、篩という共通の持物をもって描かれているエリザベスの肖像画をたどることによって、1580年代に起こったエリザベスの服飾の変化を解明する手がかりが得られると考える。

### 2. 1579年の「篩の肖像画」

篩はローマ神話の女神ウェスタ (Vesta)<sup>5</sup>に仕える巫女トゥッキア(Tuccia)がその純潔を疑われた時に、篩に水を入れて一滴もこぼすことなく運んだという伝説にちなんで、純潔を表す。中世にはトゥッキアの伝説は、アウグスティヌスの『神の国』によって「聖母マリアの余形」と考えられるようになり、女性の肖像画を描く際に見立てとして用いられ、描かれた女性はトゥッキアの「美德をわかち持つものと見なされ」てきた<sup>6</sup>。ストロングによると、最初の「篩の肖像画」は3枚描かれた。そのうちの1枚がジョージ・ガワー (George Gower 1540-96) によるものである(図1)。ガワーによる「篩の肖像画」は、顔のパターンとヘッドドレスが細部まで「ダーンリ



図1 ジョージ・ガワー  
エリザベス I世 飾の肖像画 1579年

の肖像画」に由来することから、1563年の布告に示された女王の肖像画の公式の制作パターンにのっとり描かれたものであると指摘されている<sup>7</sup>。当時、人気の高い肖像画家であったガワーは、1581年には女王の首席画家 (Serjeant Painter) となり、絵画と版画における女王の視覚イメージに関する独占権を得て<sup>8</sup>、他の画家たちの描く肖像画を検閲する地位に就いた。この肖像画では飾は女王の左手に持たれている。そして飾には ‘A TERRA IL BEN MAL DIMORA IN SELLA’ (地上にては鞍上に美徳のとどまること難し) という「ふるいわける」という飾のもつ本質的な行為に関わる銘文が書かれている。そして女王の右肩の後ろに描かれた地球儀には ‘TUTTO VEDO A MOLTO MANCHA’ (一切を我観ずるに欠くところ多し) と書かれている<sup>9</sup>。

この時代の服飾は、袖やラフ(襷襟)、をはじめとして、それぞれが独立した服飾品であった。そのために、今日的な感覚でいうならば、それぞれをコーディネートして装うことができたのである。このような視点でこのガワーによる肖像画を見ると、1575年から1580年代初めの服飾品が組み合わされて描かれていることに気づく。ガウンの襟ぐりは深く、前で緩やかなアーチを描くラインをとるスクエア・ネックを示している。ラフ(襷襟)はまだそれほど大きくはなく、しっかりと8の字形に整えられている。袖は、1570年代後半の肖像画において、フランス風

ガウンに組み合わせて着装されていた刺繍の施されたタイトな袖の代わりに、スラッシュの施された比較的ゆったりした袖が見られる。同じような袖は1580年代にヒリヤードによって描かれた彩色写本などに見ることができる。袖口には、襟元のラフとデザインを合わせた手首のラフ(ラッフル)を着けて描かれている。ガワーによる1579年の「飾の肖像画」は、女王が左手にもつ飾や女王の背後に描かれた地球儀、そしてそれらに添えられたラテン語の銘文によって、エリザベスに対してウェスタの巫女という新しい概念を与えているのであるが、服飾に関しては同じ頃に描かれたほかの肖像画との間に大きな違いを見出すことはできない。

### 3. シエナの「飾の肖像画」

ガワーによる1579年の「飾の肖像画」の描かれた翌年、「飾の肖像画」は、新しいヴァージョンによって描かれた。このうち、もっとも完成度が高く、よく知られているのが、現在シエナに残されているものである(図2)。この肖像画は19世紀末にメディチ家の屋根裏で発見されたもので、フランスの王太后カトリーヌ・ド・メディチを経てメディチ家の所有になったとされている。画家についてはコーネリウス・ケテル (Cornelius Ketel 1548-1616) であ



図2 コーネリウス・ケテル  
エリザベス I世 飾の肖像画 C.1580年

るとされている。

女王の左手に篩が持たれていること、そして篩と地球儀にラテン語の銘文が添えられていることはガワールの肖像画と同じであるが、このシエナの肖像画では、さらに3つめの銘文が女王の右手の下に書き込まれている。これは、ペトラルカの『凱旋』から引用された‘STANCHO RIPOSO E RIPOSATO AFFANO’（疲れはてて我憩う。憩いたれど心労す）という銘文である。これはペトラルカの愛の凱旋からの引用であり、イエイツはこの銘文を「エリザベスが純潔の凱旋としてここに姿をあらわす刹那を決しているのだ」と解釈している<sup>10</sup>。

シエナの「篩の肖像画」におけるエリザベスの装いは黒と白である<sup>11</sup>。ガウンのラインは1580年頃の流行に沿っており、フランス風ガウンの襟ぐりがスクエア・ネックからスタンド・カラーへと作り替えられる時期と合致している<sup>12</sup>。ここではガウンの表面に宝石がちりばめられていないということに注目しなければならない。エリザベスの服飾において、ガウンの黒は宝石の見事さを映えさせる背景としての役割を果たしていた<sup>13</sup>。しかし、この肖像画では、ガウンの黒は、ヴェールとラフ、カフス、ラッフルの白によって浮き立たせられているのである。そして用いられている分量は少ないが、女王の色としての白の重要性も見ることができる。このように女王の色としての黒と白の表明は、この肖像画が女王に対する騎士道精神の表明であることを示している。エリザベスの即位記念日の式典として、馬上槍試合が盛大に行われるようになるのは、1580年代のことで、現在残されている最も早い記録は、1581年のものである。イエイツはケテルによる「篩の肖像画」の背景に描かれた宮廷人たちを「純潔なる帝冠の処女の純粹なる帝国の支配を樹立せしむるという大仕事に献身してもくれよう背景に控えた騎士達の、決意を秘めた姿勢をも」と読み解いている<sup>14</sup>。ケテルのイングランドにおける庇護者はエリザベスの寵臣の一人として知られているサー・クリストファー・ハットンであった。女王の左肩の後ろに背景として描かれた廷臣たちの一人が、サー・クリストファー・ハットンであるといわれている。

このシエナの肖像画に見られる服飾において、色彩のほかに注目されるのは、ヴェールである。ヴェールは女王の肩の上のワイヤーの枠に髪をとって留め付けられており、その各々の髪の上に、黒いスパンコールあるいはビーズがつけられている。このようなヴェールは、1580年代以降、肖像画においてもしばしば見ることができるのであるが、シエナの「篩の肖像画」はその最も初期の現われであると指摘されている<sup>15</sup>。ヴェールはまたウェスタの持物とされている<sup>16</sup>。後に1590年の即位記念馬上槍試合においては、ホワイトホール宮の試合場にウェスタの

神殿が建てられ、3人のウェスタの巫女たちが女王に贈物を贈るといふ仕掛けが行われたが、その贈物の中に、白いヴェールが含まれていた<sup>17</sup>。

以上のことから、このシエナの「篩の肖像画」においては、服飾もまた象徴的な意味をもって選ばれていたものであり、この点で、ガワールの描いた「篩の肖像画」とは大きく異なっている。しかし、このような複雑な寓意に満ちた肖像画は、画力の劣った画家たちによって複製されて行く間に、寓意が抜け落ち、肖像画としての魅力が失われていった<sup>18</sup>。

#### 4. ジョン・ベッツによる篩をもつ肖像画

1579年のガワールによる「篩の肖像画」も、シエナの「篩の肖像画」も、いずれも名前のとおった画家によって描かれたものであった。1580年代から90年代にかけては、女王の肖像画が非常に多く描かれた時期にあたり、肖像画を量産するために、そして女王の肖像画のイメージを管理するために、首席画家による肖像画の認定という検閲制度が機能していた。1580年代に女王の肖像画を描いた下級の画家の一人にジョン・ベッツ (John Bettes the Younger) がいる。ベッツの描いた女王の肖像画は何枚も残されているが、その中に篩をもった肖像画が含まれている (図3)。女王は右手に篩、左手には手袋を持って描かれており、これは、1579年のガワールによる「篩の肖像画」を左右逆転にした構図である。このことは、当時首席画家であったジョージ・ガワールの



図3 ジョン・ベッツ (子)  
エリザベスI世 篩の肖像画 C.1585年

選定した女王のイメージの中に、飾をもつ肖像画が含まれていたことを示している。しかし、ベッツの描いた飾を持つ女王の肖像画には、地球儀や銘文は描かれていない。複数の寓意とラテン語の銘文が絡み合って構成されていたガワーやケテルによる「飾の肖像画」は、画家個人だけではなく、神話や寓意に通じた高度な知性の後ろ盾があって始めて成立するものである。<sup>19</sup>。それらは、作り手と同じ程度の知識を観る者に求めるものであった。しかしこのような博識な知性によって作り上げられた女王の視覚イメージは、より広く流布される際には、複雑さを払拭することによって、明快に理解できるものもとめられたと考えられる。ベッツの描いた飾をもつ女王の肖像画において、寓意を表すものは、飾だけであったことはこのような理由によると考えられる。

ベッツのような身分の低い画家たちが工房の顔型(フェイス・パターン)や資料を用いて描いた肖像画は、絵画としての価値は低いものであるが、絵画そのものが象徴性や寓意を組み合わせて構成されていないが故に、女王に与えられているイメージも明快である。1580年代にベッツの描いた何枚かの肖像画を比較すると、女王が手に持っているものが、時には飾であり、羽扇であり、笏である。作画時期によって多少の服飾の流行による変化は見られる<sup>20</sup>が、女王の装いやポーズは非常によく似ている。このことは、ベッツによって描かれている肖像画にみられる女王の持物がそれぞれ交換可能であったことを示していると考えてよいだろう。ベッツの一連の肖像画は1592年より後には描かれていないことから、この時期に、女王の視覚イメージが新しい「ドイツリイの肖像画」へと移行したことが指摘されている<sup>21</sup>。

#### 5. 小さな金の飾をもつエリザベスの肖像画

1590年に描かれたエリザベスの肖像画に小さな金の輪をもつて描かれているものがある(図4)。この金の輪が飾であると見なされているのは、輪の外側と内側にそれぞれ‘A TERA IL BEN IL MA’ ‘DI MORA IN SELLA’ という銘文を見ることができるからである(図5)。これは、ガワーによる「飾の肖像画」やシエナの「飾の肖像画」においてみられる、ふるうという行為に関わる銘文を分けて記したものである。1590年の女王に贈られた新年の贈物のリストには、図4に見られるものとは少し違っているが、宝石のはめ込まれた金の輪についての記述が挙げられている<sup>22</sup>。ベッツによる肖像画(図3)では、飾はまだ大きく、女王をウエスタの巫女に称えるための持物としての役割をもつて描かれている。しかし、この1590年の肖像画では、女王のガウンのウエストに結び付けられた金の輪アトリビュート一飾一は、絵画の中で寓意を示すために描かれるための持物ではなく、象徴



図4 作者不明  
エリザベス I 世 C.1590年



図5 図4の部分

的な意味をもつ宝飾品なのである。すなわち、女王の服飾品のひとつとして扱われている。アーノルドは女王に対して廷臣たちから贈られる宝飾品が、16世紀の第4四半世紀から、聖書に由来するものよりもむしろ「一アストレアとして、ウエスタの巫女として一エリザベス礼讃の古典的な側面を反映」する<sup>23</sup>傾向にあることを指摘している。<sup>24</sup>

6. 結び

1590年の即位記念奉納槍試合において、ホワイトホール宮の馬上槍試合の会場には、純白の琥珀織のウェスタの神殿が建てられた。そしてその神殿の前にはイングランドを表すノバラ (eglantine) のからみついた柱が建てられていた。この柱にはエリザベスを称えるラテン語の詩が置かれていた。そして、ウェスタの神殿から出てきた3人の巫女が女王に高価な贈物をしたのである。1579年にジョージ・ガワーによって描かれた「篩の肖像画」では、エリザベスはウェスタの巫女として篩をもって描かれていた。ケテルの描いたシエナの肖像画では、ウェスタの巫女であり、また同時にヴェールをまとったウェスタ女神として崇拝されていた。1580年代を通じてエリザベスに対するウェスタとして、またウェスタの巫女としての礼讃は熟成されてゆき、1590年の即位記念馬上槍試合において、ひとつの完成形となった。1590年代に入るとこのような礼讃は宮廷にかぎられなかったようで、シェイクスピアは『夏の夜の夢』において「西方の玉座におられる美しい姫君 (a fair vestal, throned by the west)」<sup>25</sup>と、女王をたたえているのである。

ところで、ケテルの描いたシエナの「篩の肖像画」がエリザベスの色としての黒と白の表明であるならば、別のかたちで「色彩の象徴主義の可能性」<sup>26</sup>を示すのは1585年に描かれた「アーミンの肖像画」(図6)であるといえる。この肖像画は、かつてエリザベス女王時代の最も有名なミニアチュール画家ニコラ

ス・ヒリヤードによって描かれたとされていたが、今日では紋章官であったウィリアム・シーガー (William Segar)の筆とされている。シエナの「篩の肖像画」がエリザベスの寵臣の一人であったサー・クリストファー・ハットンと関わりを持っていたのに対して、この「アーミンの肖像画」は、エリザベスの宰相バーリー卿ウィリアム・セシルの所蔵であった。肖像画の名称の由来は、女王の左腕にいる王冠をつけたアーミンである。ペトラルカの『純潔の凱旋』の描写では、純潔の旗印としてアーミンが描かれるのが普通であった。またルセルリの『著名紋章集』において、ルクレティア・ゴンザーガの宝石をちりばめた首輪をつけた白い雌鹿がオリーブの木の下にたたずむという紋章が、ペトラルカのアーミンと結び付けられて解釈されていることから、イエイツは、「金剛石と黄玉は、清純さをこそ象徴する宝石」であると導き出し、アーミンの肖像画において着けられている「宝玉の数々は、その色、青みがかった白、ならびに黄味を帯びて、多分金剛石と黄玉だろうが、この貴婦人をその純潔の中に閉じ込め」ていると解釈している<sup>27</sup>。このような「アーミンの肖像画」におけるペトラルカに由来する宝石の示す純潔の象徴性は、シエナの「篩の肖像画」に見られる女王の色としての白と結びつくことで、1592年には「ディッチリイの肖像画」(図7)に見られる白



図6 ウィリアム・シーガー  
エリザベスI世 アーミンの肖像画 1585年



図7 マーカス・ゲイラーツ (子)  
エリザベスI世 デイッチリイの肖像画  
1592-94年

の礼讃として現れることになるのである。そして、ラフと「調和のとれたアンサンブルを形成する釣鐘型のスカート、すらりとしたボディ、ふくらんだ袖をもつ最も魅力のある外観」<sup>28</sup>と評された1580年代のエリザベスの服飾は、色彩の象徴性と宝石に与えられた純潔の象徴性を衣服の表面において合体させて体現するために、より平面的なデザインを求めることになるのである。

注

- 1 Roy Strong : *Gloriana* , Thames and Hudson, 1987, p. 9
- 2 Ibid.,p.35
- 3 ストロングは1579年の「飾」の肖像画について、「この絵画はエリザベスの肖像画における新たな出発を示す」と述べている (Ibid., p.96)
- 4 Ellis Waterhouse: *Painting in Britain 1530 to 1790*, Penguin Books, 1978, p.36
- 5 ローマ古代の都市国家ラティウムに溯るローマ最古の女神。炬をつかさどる。ギリシア神話のヘステアと同一視される。
- 6 J・ホール、高階秀爾監修『西洋美術解説事典』河出書房新社、1988年、p.235
- 7 Strong: *Gloriana*, p.95
- 8 ミニアチュールにおける権利のみはニコラス・ヒリヤードに与えられた。(Strong: *Gloriana*, p. 15)
- 9 ここで掲げたモットーの解釈はイエイツによるものである。  
(フランシス・A・イエイツ、西澤龍生他訳『星の処女神 エリザベス女王』東海大学出版会、1982年、p. 263)
- 10 イエイツ 前掲書 p. 262
- 11 エリザベスは1564年6月の仮面舞踏会においてスペイン大使に黒と白が自分の色であることを表明している。(Janet Arnold: *Queen Elizabeth's Wardrobe Unlocked*, MANEY, 1988, p.1)
- 12 Arnold: op.cit., p.118
- 13 黒や暗色によって宝石や黄金の輝きを際立たせるという意識はシェイクスピアの『ヘンリ四世 第一部』第1幕第2場において皇太子ヘンリーによる次のような比喩に現れている。「いふなれば、暗い地金にはめこんだ黄金細工とでもいおうか…なにひとつ引き立てる地金もない場合よりも、いっそう強く人の眼を引きつけるにきまっている…」(シェイクスピア、中野好夫訳、『ヘンリ四世 第一部』第1幕第2場、シェイクスピア全集 4、筑摩書房、1982年、p. 142)
- 14 イエイツ 前掲書 p. 263
- 15 Herbert Norris: *Costume and Fashion vol.3 Book II*, J.M.DENT AND SONS LTD,1938,p.627
- 16 アト・ド・フリース、山下圭一郎主幹・共訳、  
『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1984、p. 667
- 17 Arnold: op.cit.,94
- 18 シエナの「飾」の肖像画のかなり技量のおとる画家によるヴァージョンについては、Strong: *Gloriana*, p.101に見ることができる。
- 19 ストロングは、「マス・メディアが成立する以前には、人々の忠誠心をひきつけるために、作り上げられた君主のイメージは、人文主義者、詩人、作家、そして芸術家による仕事の産物である」と述べている。(Roy Strong: *Art and Power*, The Boydell Press, 1993,p.21)
- 20 特にラフは敏感に流行を反映して描かれている。
- 21 Strong: *Gloriana*, p117
- 22 Arnold: op.cit., p38
- 23 Ibid.,p.71
- 24 女王に対する礼讃はアストレア、ウェスタ、シンシア、ディアナなど。1587年にサー・フランシス・ドレイクによって献上された羽扇は、女王を月の女神シンシアとして称えるもので、黄金の持ち手に真珠母で作られたの半月の意匠がはめ込まれていた。
- 25 シェイクスピア、平井正穂訳『夏の夜の夢』第2幕第1場 シェイクスピア全集1、筑摩書房、1982年 p. 225 『夏の夜の夢』は1600年に出版されているが、執筆は1594年か95年初めであったとされている。この喜劇は貴族の結婚祝いに上演されたものである。
- 26 Strong: *Gloriana*, p.21
- 27 フランシス・A・イエイツ、西澤龍生他訳『星の処女神とガリアのヘラクレス』東海大学出版会、1983年、p. 192
- 28 Graham Reynolds: *Le Costume en Angletterre au temps d'Elizabeth et de Jacques 1er*, *Le Costume des Tudor a Louis VIII*, Paris, 1950,p.135

図版出展

- Roy Strong : *Gloriana* , Thames and Hudson, 1987 (図 1、2、3、6、7)
- Janet Arnold: *Queen Elizabeth's Wardrobe Unlocked*, MANEY, 1988 (図 4、5)